

七十

は出て居る者だ……先刻の貴様の話では何だか
裏返りになつて居るら——いふ 是れは大塚夜火
の乳母かも知れん 龜山はせよ 早と遅とをせ
と大塚「たぞ」

其色也、雑談と一、

あ、えうに俺は却下、飯をやるのを忘れた、あ、村工
何と、この山崎の、何と、何と、出た、こゝろ、は、龍、は、大、だ、と
お、ま、は、始、中、に、た、る、皆、つ、ま、ま、免、の、向、ま、の
隊、は、人、が、さ、う、い、ふ、飯、糞、を、許、り、や、戦、中、の、出、ま、え、ん
位、は、よ、う、実、は、今、何、れ、だ、奴、を、使、は、さ、う、思、う、ん、だ、の、危、録
ふ、は、は、え、り、も、子、も、は、い、い、ら、な、

傳は出て行つた
入世だ、山崎中村の、入る、ま、た、是、れ、は、お、手、の、何、所
の、を、夏、場、と、い、ふ、

……此の野郎と、ま、ま、の、片、の、儼、慢、は、生、き、ま、り、
ぬ、ら、い、一、度、は、乳、合、と、掛、け、合、は、清、ま、ん、戦、中、準、備
習、以、来、軍、部、の、精、神、が、戦、隊、の、ま、い、こ、の、柄、の、ま、い、
133 齋、成、張、り、の、ろ、く、我、は、何、れ、此、の、男、の、為、に、務、ら、う

十

いふめいれに... 戦後一良

赤此の夜の騒ぎ... 却後夜勿論思

村上隊長... 撤収... 撤収... 撤収...

井川大隊を見

敵の伊江島... 撤収... 撤収...

亦各隊の状況を見... 撤収... 撤収...

下士官の指揮... 撤収... 撤収...

この命令の徹底... 撤収... 撤収...

今下邊一のふらふら

却隊を輔佐する若官素のしり隊は能く及ぶは既明
しやふらふら

「却隊をぬきもう直に角のふらふらと思ひます 幸山人材が
二條の先攻を帯て葉草園でふらふらゆりてすか

此冬隊の團次地は強盛は却隊長の意圖ではある先
却隊は各之岳に集結と言はれり

よて支隊本部の突破経路は(地回で)此所と
して通すことには先づ其意あり(谷間に東より西へ
向ふなり)

隊に別階を設けしに却隊は(音)場所に来て
磨りしに思ひますから儘の道中肉とふらふら
せん

「ふらふら」ふらふら、油草園傳令一組
出後準備と東へ、今下邊にふらふら

ふらふら、其官の機を何所かふらふら、
其意あり、ふらふら、其意あり、
ふらふら、其意あり、

ふらふら、其意あり、
ふらふら、其意あり、
ふらふら、其意あり、

北に附す加へて富野の戦況を七曲訓と云く一物
証とす南の兵

倭糧不運に故に手は濃く候といふも亦如し
今の時々に即ち直せばいと次期戦軍にも影響
すものも如し

油中隊に與ふる命令を告ぐと云ふ一は傳令は先
刻の如く候との儘に通信隊に書きたるに
第一文書等は部隊長の檢査兼中隊本部
での添付に固するものにて食糧と糧食運來
を持て迎へるに旨のものが、油中隊に添付名簿
及び自分の所在地であり地盤をばらばら大文又細う
兵は勢をよそあてはつた、その後と統そ自介は

指揮隊の兵舎は巡視にたれ、
何所もたれ、一とある指揮隊の連中は人員増加にこれ
入る兵舎の候に居るもの増築中である、増築して
油中隊の營は、一で床は乾パンの類を布して糧
食庫兼用である、それ以外も兵舎を収容する
兵舎の裏に外の籠である始末だ、餘り人員が少い
兵舎は、何所か増築して居る、是れと一部は

四十一

病院の構築に一部は炊事場に餘りは陣地構築中
であること、或る程人員不足の痛切に感ぜられる
諸の

隊長殿 葉菜に火薬を埋めたる雷管の代用になり
ませんか、と問語られたる雷管不足は雨後の戦力に
大いに影響するものか、と云ふことと考へ中へ、
部隊全を致痛の種である、何とかはらへるには無
いから一々やそ見よう、
近來、運屋の端や玉城
の昔に田形黄色葉を砕いて空葉菜と詰め
上部に紅色葉を詰め、中央を挿入して、
田形黄色葉と細色して實際して見ら

ドーン、うんやっ、
飛ぶと一同一夜……然し田形黄色葉は
何もばらさない、葉菜の口は思ひがスの為
一手汚れると、
今、
専心試行……
前失敗……

107
一隊の雷管の準備に注意するのことも

七十五

問はふつ
「一、雷管の中をやそ見よう。」

代用雷管(試作)と実験と見ると「亦失敗！」
今日は爆破時「見えは」木の枝に縛ってやそ
見ませう。……失敗に終る。……
何回と行く方法を覚えてやそ見ると「一向に炸

けぬが結局 駄目だ」と判決
実験用に取り出し、黄色薬に燃尺と見ると
黒い煙と出ると「ぬえ」のみ

「能感の火薬にはおれにあんは威力が。」一向はよく
黄色薬の性質を知った

「これは悪戯として指燈の火合で時と遅くわす
以前は前線隊に居た由城清正といふ男のこちうから
見せしめを早く

「あ、隊長殿が元氣なようです、宮城は今後真打
のこころへ教道と参りまーし、精進の砲台ごう
まーたの中隊長の死にたいと砲台破壊も
成るのうら。……おれ以下十数回です、前線隊
の……」

六十一

か、由緒分は元氣で何事だ、うちの方も兵力の
足らぬ弱さがあるんだ。お前も聞かんと思ふの志伊良
上穿女は、戦死しなうて分隊長の居らんのだ。丁度良
い所へ来て呉れた、何時来るの、心待ち待っておたうだ。
兵隊は……

「兵隊は途中に捨て、来なさい。命令は是の通りです
何兵隊を捨て、来た？、そんな不都合ではいかん
兵隊の世とてどうして戦事するんだ、……」

「……つと敵を見え居ると何とも云へぬ、いかうい
は打たれて来た。此の男の罪ではなかつた。結構官に
禁の眼に流、如くものも認められ、此の女は以前
隊本部に属し隊一番の男も優秀な兵であつた。
この戦役で隊を棄て上り隊にのりこめもつてあつた。
もし、貴郷隊に来い、と言ふ、戦時特種所
が支隊長代理、平山尺隊に去是兵中
……さん、貴郷隊出身者の隊に帰るともな
……」

七十一

早速松尾命令と出さしむるに

宮城清心と宮城保盛(一名は松尾信房の弟)の二名
の隊を印移す小隊にた。松尾信房も兩人も

同郷出身の兵二名の配属を受けし(非常な隊に
小で此松尾伊良の仇を取ると言て張り切つて
おれ

寺山尉は、は、松尾初、史、兵、と、連、つ、ま、た、女、は、
全部は渡御隊のまゝといふ。若、の、す、ま、と、末、の、小、隊、の、状、況、は、

是、の、高、江、洲、と、言、ふ、田、舎、の、外、に、昔、年、兵、を、約、十、名、位、は、
直、降、握、つ、ま、た、といふ話である。

遠、く、難、し、に、独、り、中、隊、で、あ、る、丈、に、外、の、状、況、の、如、り、に、い、
早速搜せし見ると………搜す必要もない。此、所、即、ち、
情報班兵舎の直上の所に休んでおれ

「お、高江洲上等兵 木下はとうとうか
は、上、高、江、洲、上、等、兵、以、下、八、名、先、刻、到、着、致、し、ま、し、た、
隊、長、殿、は、印、隊、長、殿、と、一、緒、に、来、る、と、苦、で、あ、り、ま、す、
私、の、隊、中、兵、隊、の、隊、と、共、に、寺、山、大、尉、殿、の、指、導、せ、ら、れ、

七十九

色んな活を聞いたが大勢はつては取崩に知つておる
いかにいふも相違激やであり継子いおめにせよ水た
大に苦戦した事は窺はれる 木下少尉の顔と腕
とやうであるとの話の程度は分らぬ 大車になら
ずにはいへぬ... 早々マニョに東行いおはめとせりた
心配はなつて来る

戦中指揮官の用は 転進部隊の糧秣受領や
始末水吸み等の為だったと云ふ

先月末甲隊備下命令當時は此辺は人の通つた跡も
ない下草の茂つた森林であつたに 未だ一ヶ月も経た
ない今も... 今と昔の大通にはさぬ 誰かの

谷文銀座ですぬと言つた 今と昔の通つた自初
草と草の道はさぬ言はぬの道が出来て連日人通り

の地は古い今と昔の中も変わった 地一たん作ら
大造りありて一もつは峠の道敷や用林密

跡地にはおらぬい、といふ別な基地の事だ
上の山に敵と人の果方が今も早の果は 石を

の山頂の山に今も残つたの如くはいかに先に向

出まて居候

最初の計画には敵の増用戦法として橋頭堡を
作る地盤を拡大してむと方法を収るらうと予
想して居候にやあるか今の現況は既に非ずだあり

圧制的物量と縦横に駆使して徹底的機動に
出て来て居る まさか此の山中までは来ない

思ふ所居候に開戦句々前進基地は荒れ北に
いふ北此所へも来るか分らない 来たれたとすゝと見よ

通の大通と居候このころでは折詮企圖の社説によつては
来るらも無い 加之敗残兵をも受へて有る衆世衆の

うよくして居る 始末のつむむのははい

亦一方糧秣彈薬は最近やうと懸念的を敵社説と
終る所が兵に及ぶ此の上層者とのけりて急い

や居所て戦中任務を為此の方に守り廻り兼ねる上は
昨日の餓饉よふふ分る

何れかと思ふから今の戦は終つたらう 西に
此でよく 成務的な事

知 内務省の報告に依りては...



今日も今日の人出入は多過ぎた。本所口も寺山へ針
を刺へて、半一は夜に迎へた。我場で會つ同期生
友情、意気投合、此の境地も格別な成である。
之れを分るるもの

二十日朝

今日も秋高波瀾に當る。と思はせる。如く起床
直後早速油井隊と連絡

一、中上部隊の捜索事件

二、名護新地股糧糶集積所、攻出成果報告中

三、樺基地前伏撃事件

一、中上部隊の捜索事件

島志堅上等兵と長とす。六名の部隊長、早名夜

出地区、密偵捜索隊は昨日の命令受領後、道下

出散せし、何事得る所なく、刻時隊隊一

長長森の早名夜、同隊出散後、一、早名夜

の報告、島志堅上等兵、島志堅上等兵、島志堅

の報告、島志堅上等兵、島志堅上等兵、島志堅

の報告、島志堅上等兵、島志堅上等兵、島志堅

の報告、島志堅上等兵、島志堅上等兵、島志堅

の報告、島志堅上等兵、島志堅上等兵、島志堅

の報告、島志堅上等兵、島志堅上等兵、島志堅

の報告、島志堅上等兵、島志堅上等兵、島志堅

八十二

註

✓英魂未だ眠らざりて戦野を彷徨

耐え難く思慕を神憑に残し余天内地に

帰還す因末一平有半歌記(在子記)

の事ども萬々氣に懸りしと遂に録格下

得ずしと今に至る遺憾に極みなり

今思ひ新たに歌記を出し追憶の情亦新なり

以下後時と回顧するに當時の光景眼底下

映し来りし身一部印象不先不ふとよりと云

ぬり得ず

英魂未だ眠らざりて戦野を彷徨

攻撃力

炭、小隊を清の印を馬

兵力、一々小隊強

擲弾筒一基を含む

戦果

糧秣集積所一爆破

隣接自動車庫攻撃 自動車庫二爆破

糧秣庫放火を成功

20日? (同攻撃部隊)

四月十日夕閉迫ると共に基地を出た小隊を隊以下

小隊、熟知せる地形を利用し、仲真部隊の中央

を谷沿いに先づ踏見橋上方の高地に出た

そこで敵を偵察する為、據点を設定 一部兵を

派遣し見ると直ぐ目の下に分哨を置いた

電話線まで架設し、その報告を、小隊長以下全

隊の秘匿裏を穿つと要すべく一時道路を横断し

北方地帯に転移す

目的は攻撃目標の眼下に作り

147

八十四

暫く休憩の後、攻撃前進を開始す

附近一帯は名護農事試験場用地の存茶園桑園

或いは甘藷や甘蔗畑加ふるに戦中事ごとく雑草

は生ひ茂るに委せてある。彼等は此の叢林を縫ひ

小川にうへを走り、刻一刻と攻撃目標に近づいた

南城の南面斜面に達せる頃突如流星の如く照明弾

の光を統べて、ブーンブーンとや聲

攻撃班員一同は驚愕した。何の事か、企圖の暴露

しよったと思ひ込み、其の場で腰を板のいた存に

坐り込んでしまった

然し暫くしておと今迄の騒ぎは何れやうか

もとの霧に夜に歸つて攻撃目標の中心より浮ひ

上つて来る

はるかかゝい敵さん分らなかつたのだとホゴソク

這ひ出してく連絡を密に動く出た

ホ、誰か叫んだ

嗚呼、亦もや反斜斜面に於て照明弾統べて

同じ存は聲

元、まよー

見付のつゝ、一まへに北東に強敵ありのみ

斗志隆上歩兵の指揮する 榴弾筒は 砲車子

丘に向つて射撃し始めた

攻東に任ずる兵は殺氣立ちあがり攻東目標に

向つて奮勇進出する

と一斉に走り出した

全員玉となり攻東に陥る様であった

グーン

グーン

攻東開始……… 吹っ飛ばす榴弾集積所

次で攻撃圏を西方に伸張

一同の目に映るのは 前方廣場に立ち並ぶ夥しい

自動車部隊 敵さん大慌てい 前照灯と

点トまつらに本部の方向を走って行く

一瞬耕地股は彼我のりかかす 還初念

敵の大部は逃げ遅れた 攻撃隊は稍冷静に

取らないうちに、残存自動車と改出する。

然し、まず計り少量の爆薬を車と手榴弾の
のみ、然し、命と預む此の武器は、
（注）は、
自動車に乗り込んで何部を破壊しようと思へば、
ゆゑ視て、少々の事では壊れは、
手榴弾と点火し、やっとな物を、炎上せしめた
皆方々あせつて来た。

え、もうこうあつたら全部パンクさせて終へ！
と持つて居た銃剣で、ダイヤを突き出した。

（全く笑止千萬の話である）

折の少々の力では突き刺さるどころか、反つてはね
返つて来る。

よー、俺がやつてやる。

と、背中を、銃剣の下部の銃剣を、叩きつけ、
弾を、刺し、是れが、何と銃剣の中、空の
る館の扉に、曲つて、戻つた。

残念に 砲丸の音は

と早速引上げた 引上げるとなるともう敵が居るのか

何の音の 全く飛んで走ると如く山を駆け上った

自光刻據点には 瀧見橋附近に東ると、あまの舌の

今宵は跡がたまたまはたておる 大方ジープにでる車

こゝに帰ったのか

✓ 仲兵衛部降上素一息入水よと一寸休んでおるよ

下の方で銃砲声の盛んに聞える

奴さん今頃にあつて慌てゝゐるわいと一寸乳持

良き〜て暫帰るゝ来た

三 櫻基地前伏撃成果報告

第一中隊 名護岳前進據点の撤収後 〇二股

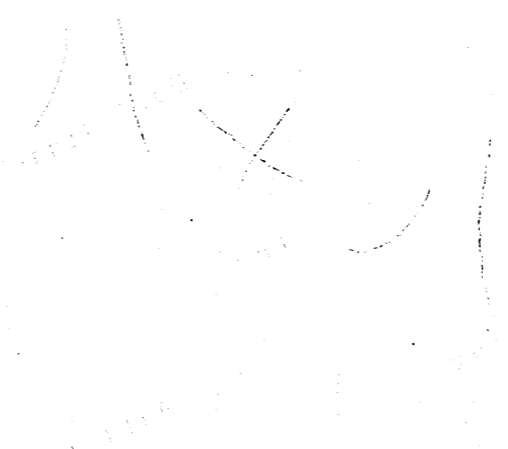
附近に基地を設け連日基地前方に出没する

作候を求めく攻惠中

本日迄に判りたる戦果は下記の如し

十五日 兵三 十六日 兵二

十七日 小畑自衛隊一十八日 十三



九日 兵四員傷を蒙つたもの三
 以上如し 本日の作候群は前日に比し 武装重く
 行動亦極めて慎重なり
 書道思にあつた
 本部の指揮監督令は多数の人の出入り為つた通り
 の中々落件はない

「照屋を攻めよ！」

「返事はない
 眞志志！」

「はい！」

「照屋を攻めよ」と叫ぶと来た
 彼は直ぐ能ひきり行つたが三十分経たぬ内に
 にさし下ら歸つて来た 後には照屋の何事
 の思案がでよつて来る

「照屋を攻めよ」本部も兵隊屋改表以来不十分
 氣は上つてゐるが今此攻の作は未だ此處
 一と一との固つたものなれ 何れの方法を講じ
 照屋を攻めよ

八十九

「寔は先刻から本郷の兵隊と語り居りました。兵隊夜殿の遊樂計画にもあつた通り大浦湾地已の攻取とやつて見よとの話と居りました。うん。それは良いが、お前の居らる水全部隊の方面の攻取の計画は如何なるか。」

「然し兵隊達の強さを知つて是非たのせて急ぐと言つて聞きますか。」
「そのか……お前のたのむ事は指障を完全にとるは居ら……」

「たけ！」
命令一下彼等は欣然と早く出發準備と整へ始めた。
特に右の小隊は人の真剣なものがある。小隊長以下幹部連年の真先になつて一生懸命に大兵の戦後爆撃の梱包等と準備である。

「頼む……これほどは攻取の中を成功するぞと心にかけたをんである……」
机に向つてこれら攻取命令書と表のものと鉛筆と想のたてておつた。

部下の準備は大方指果し終へたといふに、
かゝる系に、彼は攻果は成る確信に備へた隊は、
とてたの如き語を

「今日中野の指隊は、
兵隊の班長は、
昨日方向を間違へて大浦街道と、
通る所を、大浦街道と見初め、
附近で敵と遭遇し、
我々は屍作位に収まるといふ事、
悪いと思つて大に戦ひ、
不意の爲所期の目的は達せられ、
種々は若干獲得した。今度、
攻果したる多分大攻果がある、
いふに、大に効果はあり、
彼は、
大して、
地盤は、
す。

九十一

此から隊長殿 菅江隊の榴弾筒を二筒ほど
配属して貰ったのですわ……

亦先刻松田隊の上で休んでおた卓土部隊の
兵隊の榴弾筒を持って居りましたので此を二筒

と弾丸下大数ヲ譲り受けました 序に各人持て
る丈の手榴弾も僅かの事だ 兎に角数隊兵の

手榴弾おんかを持てるのは不都合です 任ずる
者は何事兵隊隊長等とて此の如くまわす連中へ

持たすといふ法はありませぬから 卓土部隊兵の件
々にまで手榴弾を持ってあつていひです

どうせ重となつて来ると兵隊も何と云ふ
で…… 何いすよ」と昂然と言つた

「ん うまくやれば、全くだ
以上の事を参考して攻果命令を作成した

急ぎ準備をして居る様にお目急作命のこととて
仲々持たないで此に幹部は準備の完璧を期

さうとて、慎重を期しおる
各隊連も速に命令をこなすこととておる

155

一しきり 曙初め終つて
照屋軍勢の来社とく現はれた 攻東班一同どの
顔を見ても眼光が鋭い 中成の信念に満ちてお
のであろう。

攻東命令と下達し
比は南より出てきた

北の苦い下り ^{小隊}村上君は良い部下を持つ
幸福は全之照屋は激は人物だよ。

赤青年吳達も皆可愛い 奴許は攻東に力
といふにめんは具合に張りやわろ 寝て居ても
乳持の良い 俺もめん部下のめんはあ
と嘯るのみ

本部の連中に出た後 ひっそりして 何だか
乳の抜けた孫だ

攻東の成功とこれには良いが……と心念どつ
作戦に入らる

上地記者の隣りに情報者で附の青年兵と
宇土部隊の来る——隊長は北さんか

其合の悪く寝ておる... 新聞班の居場所
の無き所... 隊長殿上地はもう一つ小屋を建て別荘と

見たと思ふ所りますか 兵力を若干分けて呉れま
せんか... 一うんよからう 首領を討つ言つて平復

傳つてもうよ... 暫くほんやりとあると第一中隊から傳令
軍上部隊長殿の見付ありまして只今當牛隊
にて休憩されて居ります夕刻頃谷文虎の戦軍

指揮所に到着されると思ひます
概要斯の如く報告しつからず本部の指揮班と
合の何やら連絡に行つた

指揮系統の全この間北去つた部隊は遂次谷文虎
周辺に集結した来た 平山大尉も手あづかりして
あつ村上全々やり切水んよ 早々午上印隊長の
来る水んかな

いや来たつて同じですよ 兎に角我々士官候補生

出身の者で大にやりませう。私に未だ奴も奴
此の張りの陣地につきますから
急に薄御守衣兼國頭支隊を謀りて
走り廻るおれ

ふと見附いて見れば未だ第一平塚の第二十隊が
北面の武士は奴も谷北側の兵備に當るおれ
第一平塚が極基地にまである関係上兵力も此の
方面に厚多に充てる中軍を認め命令を傳
達せしめ、日警備地には敢て印隊を充
當する如く準備す

多忙は一日であった。陽は將に暮れようとして
ある。

山本中尉 宇土印隊長はもう直ぐ着のれと
思ふが先刻おれに陣に準備が出来ておれらう
は、萬遺賊の陣に陣を置く
室内に、さう来た宇土印隊長に對する不満
が一極で何時爆發するも知れぬ形勢だ

北の早も我の胸中を覗いて

「おい村上 辛土印隊牧もつらいんだぞ 全々部下の今の様はごまだから大分苦勞さ北でおいだらう」
「我がの皆んなは〜く大いに慰め元氣をつけて上げはえてはいかん 我輩は今が一番大いなる時だから」
「赤先刻から貴様の話を聞きのると外に放り出す寝かし置く様と思へる」部隊長は午は何時か入北で上げよ

部隊長に討つとやその不満は一時押へて
真階と打診する如く意見の一致を見た

海軍の鶴田部隊も来て居る 鶴田部隊は海軍の特務隊行艇隊で白西部隊と同じく運天港に基隊である 然しく隊夜は同期の出身
「うへは昨日連絡は来た鶴田隊は
初は覚えて居ないか」

白西部隊は海軍の特務隊であつた

鶴田部隊は海軍の特務隊であつた

九

陸上の戦斗技解は下手らしい（然し大分陸戦の準備は
はいたつた）（免れ角 真知山の戦斗は魚雷
艇に装備された二五ミリの機銃を外へく相寄暴
小廻った様がある

北平山人材の種々雑談に取つておる。……
南却地には砲声の絶えたる兵の一とに照作
彈の上つておる

月は樹間を油煙、淋しく流水兵舎の外部の斜
面は月光の所為だけには夜先虫の氣味悪く
輝いておる

しやめて下の方で人聲のする
「字工部隊隊長殿トヤロカ」
山中射撃中道と出脚して居た

暫くして
隊長殿字工部隊隊長殿の到着を知らせられた。……
いゝ、あ、此所か、と言ひ下ら字工部隊隊長殿の入り

一瞬、何とも言はれぬ力の胸にこみ上り全身の血の

くね、なつて何のら言ひ出せば良いか見當らつたら

「部隊夜敵や苦勞さんでーだ」

やうとこれ火の事を言つて後は胸に塊の孫はものを

含み乍ら静らくと沈黙を續けた

山車中尉以下の幹部も口先はな何となく事と

言ふてゐる……俺には主人は蘇生當り出来は……

幸山大尉の言葉地、葉草園で別水の時と回顧して

宿の糸口を付けて呉水氏

北も羨望を感じて寝ておるであらう仲ノ物を

言はうと……

……幸早大佐は或人の、英雄的凡格のあつた……

思ひ出す、但し戦中前の中であつた

部下の指導、大隊長佐藤大佐は

一切の指揮と看做して各兵士に

「各兵士は部隊を

守るべきだ

と云ふ

……

……

七

と勅語

入北代

名目

彼は武装を解き作戦をたてて来た
りし部隊長の顔を見つめた

人の姿に入ると
その顔の裏面持が入ると、裏面にある

襦袢

半正部隊長は痛め、足跡は如く同じ襦袢
服装を整へて陣中へ

陣中……音律の部下が戦死のあつた
陣中……襦袢を穿つてあつた結構です

自分達の心の中を口にする人間……事と言ふやあ
とあつた中深く……感……感……

その晩は半正部隊長と団んで襦袢と真部山で
襦袢に花を咲かせた

(真部山で……の語を略す)

半正部隊の部下が陣中……半正部隊長と一帯に
花を咲かせた

真部山で……の語を略す

九十九

早々色んな話の聞きたいの合は其の録格のばい

北に市下は真部公で部下の此の部隊長の命令で

ちりちりに配属させられた為全部を掌握しつゝるは

彼の負傷は思はずより其傷の浅かつた

腹の裏よりと休養しつゝ北部隊の善後處置は

俺のうまい命令もやろ市下も極力部下を掌握

す。極に努力せよと命令して置いた

市下部隊長の團玉忠談會なるものは彼等が

戦中苦悶談と有りやめて愚痴を言つてサーも

進歩的な発刺にる企圖のこゝろの合おい

話に次第に悲觀的となり士氣にも大に影響する

北の軍司令官の意向通り團頭支隊の任務は明瞭に

ありしや市下隊長の報告する時は軍司令官の

命令の如何に状況と打合して是れんか



部隊長殿 先刻の語では一体これからどうされる
の事は何ですか

いや後援の計画通り遊撃戦にしよう
と聞くとこれの許りがある。一作彼等は遊撃戦
と云ふものを金と知ると、何の準備もなしに各地形を
知りながら突入するつもりか。果して遊撃
戦が成りますらうか

「部隊長殿 幸甚部隊の転進して遂次到着
した事にかうは金と指符系統の確まり居りせん
且命令のまちまちで部隊全般の戦意もいさむ
のを認めません。そこで今迄は平山大隊の部
隊長代理として概ね部隊長の事を以てし、
此を以て取り出す。部隊長の来らぬ事を以て
且事後の戦いの基盤を築く事には急がす
平山大隊と相談して、さう急ぎ基地挺身遊撃
戦中に肉する作命原案と作る居りますか
を教へて御座ると願ひます」

北平平山内閣と岩小石原案と示す

暫く待つと戦計計画に眼を通せぬとわらふ命隊長は

村上天尉 免角頼む

實際此の計画は良き出来てゐる。君は此の辺は地形と
詳し。お部下もその様に訓練をあるのだから今度の
戦軍には落後隊の基幹にほうくやうもふたに
宜し。此の様な言を聞かすは苦しい。おそれるも宜し
は。無事のこの場合何のこのつと尻理窟を言う
る。待りやはい

「お、よき分りませう。大いに頑張りませう」

平山天尉 身上天尉の名は固執軍隊を謀としく

勤務するの、日命とある

君は免角南とく言はれり。口頭支隊長としての任中に

勤する事には了

此の邊り部隊の士氣の倍入に甚だ強一から此の

此の邊り部隊の士氣の倍入に甚だ強一から此の

此の邊り部隊の士氣の倍入に甚だ強一から此の

此の邊り部隊の士氣の倍入に甚だ強一から此の

とあると程様と望んで盗まれ

情ふ事一に 果して此の自軍たるもの

勿論大に平と吹まれ以上の出来事である

早二中隊の作戦を任と海一と兵力の内儀は

各兵隊同様の増集せる友軍は約四百名

全と精銳無比の自軍であるか？ 然して武裝は

と見れば一自中隊に軽機二挺せい人あつて

牽握一あるもの三分一 正に理想の戦力の四分一

(但し視上) 実際の士氣より見たる戦力は比喩無

あ、何と云ふは如ものか

各隊兵刀尖見表を作り地形に應じて各隊を

配置す。如く予の内令と置いた

との夜々濼溪やら明日の計画やとして抵永

一夜に

軍長志原盛も名飲依盛も今もは確にかは

一とあり 比喩の精詳多し

52